〔京都学園法学　1997年　第2号〕

《論　説》

対人関係観の国際比較

―数量化Ⅲ類による〈個人主義－間人主義〉指標の抽出

岡本　裕介

第一節　はじめに

本研究は、対人関係観の国際比較を、質問紙調査によって実証的に行なおうとする試みの一環であり、特にここでは以下の三点を行なっている。

1．林の数量化理論Ⅲ類を使って対人関係観指標を抽出する。

2．抽出された指標を使って、国際比較、およびデモグラフィック要因による比較を行なう。

3．抽出された指標を、他の分析方法によって得られた指標と比較する。

調査にあたり、対人関係観を比較するために適用したモデルは濱口（一九七七）の「間人主義」モデルである。「間人」は、元来日本人の人間観を表わすための概念であるが、この調査ではそれを通文化的比較のための尺度として援用している。その当否は次節で述べるとおり、すでにある程度確認されているが、本稿でもそれを別の角度から追認することになるであろう。

本稿は、すでに行なわれた調査の再分析という形態をとっているため、以下のような変則的な構成になっている。まず、次の第二節では、研究の理論的背景を素描し、当初行なわれた分析とそこから導き出された問題点を顧みる。第三節で調査票の構成、調査対象のデモグラフィックデータを確認した後、第四節で本稿独自の再分析の経過および結果を示し、考察を加える。第五節では再分析結果を要約し、本稿の位置づけを確認している。

第二節　調査の目的およびこれまでの分析

「間人」モデルと「個人」モデル

まず、調査の理論的背景となった「間人」モデル（濱口、一九七七）について確認したい。

「間人」とは、「個人」と対比される人間モデルである。「個人」は従来の社会科学でも適用されてきた人間モデルで、そこでは個々の独立した行動主体が人の本態であると考えられている。これに対し、「間人」モデルにおいては、対人関係の中に身をおくことによって初めて自己の存在を意識し、そして社会生活を営む上で互いに信頼し、助け合うのが常態であると考える。その結果、このモデルをもつ者は「間柄」そのものに「主体」を見出す。「個人」が個個に独立した主体性をもつのに対して、「間人」においては、誰かとの親密な関係を保つことにおいて、他者を包摂した形での主体性が生じる。

こうした「間人」の基本的価値観を「間人主義」と呼ぶとすると、この間人主義は以下のような三つの属性をもつ。

1．相互依存主義……社会生活を単独個人の力のみによって営むことが不可能である以上、相互の扶助こそが人間の本態だとする理念。

2．相互信頼主義……自分の行なう行動に対して、相手もきっとうまくこたえてくれるはずだ、という相互信頼感。

これによって安定した「間柄」を確保しうる。

3．対人関係の本質視……相互信頼の上に成り立つ関係は、それ自体が値打ちあるものと見なされ、その持続が無条件に望まれることになる。「間柄」は、操作的に扱われることなく、即時的に評価される。

個人主義はこれと対照的な以下の三つの属性をもつ。

1．自己中心主義……恒常的自己または自認的自我の確保と、そのような「自己」が人間社会の中心拠点であることの確信。

2．自己依拠主義……生活上の欲求を自らの力によって充足させる自立的態度と他者不信の傾向。

3．対人関係の手段視……自立した「自己」間の関係は、原則的には互酬的な利益交換のそれであるから、関係それ自体はそのための手段であるにとどまる。有益性によって関係が評価される。

この二つの自己ないし人間のモデルは、対人関係観のちがいによって区別される。したがって、本稿では対人関係観の国際比較を試みるものであるが、それはひいては人間モデルの国際比較でもある。

調査はこの枠組みに基づいて実施された。次項に示すように、因子分析により枠組みの妥当性が確認され、各国の対人関係観が比較された。

因子分析による再構成尺度の性質

調査は、次節に示すような調査票を作成して実施された。対人関係観は、間人主義または個人主義の意見項目に対する評定に基づく。

それらの項目は、まず因子分析により尺度再構成を施された。つまり量的データ指標として分析されたのである。

これは四八項目から成り、「1全くそうだと思う」から「5全くちがうと思う」までの五段階リカート法尺度で作成されている。因子分析は、これをそのまま量的データとして、すなわち「1全くそうだと思う」を五点、以下、「2」を四点、「3」を三点、「4」を二点、「5」を一点として分析したものである。先取りするなら、本稿の分析は、これに対し、尺度をいったん質的データとして解釈した上で数量化している。

この四八項目を使って因子分析を行なうと、四つの因子を抽出することができた。各因子に対して負荷量が高い項目の平均点（範囲一～五、中位点三）をもとに、表1に示した四つの尺度を構成した（濱口ら、一九九七）。

間人主義尺度と受動的間人主義尺度は、得点が高いほど間人主義の傾向が強いと判断され、エゴイズム尺度とエゴティズム尺度は、得点が高いほど個人主義の傾向が強いと判断される。

以上のような因子が見出されたことは、間人主義、個人主義という分析枠組みが、日本以外の文化においても適用可能であるということを示唆していると言っていいだろう。また、サンプルを国別に分割して、それぞれについて因子分析を適用した場合でも、同様の因子が見出されている。この点も、右の解釈をさらに支持するものである（濱口ら、一九九七、四五三頁）。

ところで、これらの尺度を目的変数とし、国籍、使用言語、組織観、人間観、自然観を問う項目、デモグラフィック要因を説明変数として、一般線形モデルを適用すると、とくに日本に関して意外な結果が見出された。まず間人主義尺度についてであるが、これが濃厚な国はアルゼンチン、スペイン、オーストリア、ドイツ、ベルギーといったヨーロッパ諸国で、日本は最も希薄であった。エゴイズムの強い国は、タイ、香港、マレーシア、日本、インド、フランスで、アジア諸国が多く、カナダ、スペイン、デンマーク、ニュージーランド、オランダなど、ヨーロッパ諸国はエゴイズムが希薄である。エゴティズムについては、インド、ベルギー、香港、フランス、オーストリアの国々に強

表1　因子分析により再構成された尺度

ただし、

$$尺度得点 = \frac{尺度を構成する項目得点の総和}{尺度を構成する項目数}$$

尺度名	内　容	尺度を構成する項目*
1 間人主義尺度	他者への援助や思いやりを中心とした間人主義	37, 7, 44, 27, 3, 43, 39, 30, 19, 48, 25, 20, 15, 4, 24, 13, 11, 28, 16, 1, 12
2. エゴイズム尺度	利己主義	35, 14, 26, 47, 31, 41, 17, 40, 46, 22, 21
3. エゴティズム尺度	自己依拠主義と自己中心主義の複合体	6, 9, 10, 38, 29, 45, 5, 2, 18
4. 受動的間人主義尺度	他者からの援助や働きかけを期待する間人主義	36, 33, (32), (23), (42), (34)

＊ 項目文は表２を参照。またカッコ内は逆転項目。

く見られ、日本は最も弱かった。受動的間人主義は、カナダ、イギリス、オーストラリア、アメリカであり、希薄なのは、フランス、日本であった。すなわち、日本は、エゴイズムが強く、間人主義、エゴティズム、受動的間人主義が弱いという、予想とはほぼ逆の結果であったということである。(1)

この結果はどのように解釈すべきであろうか。濱口らは次の二つの可能性を示唆している。

第一の解釈は、この結果を額面どおりに受けとめるというものである。その論拠として宗教をあげることができる。上記一般線形モデルによると、信じている宗教の変数はエゴイズム尺度を規定しており、なかでもキリスト教（カトリック、プロテスタント、その他）、ギリシャ正教、ロシア正教といったキリスト教系の宗教は規定力が弱く、仏教、儒教、神道といった日本に多い宗教は規定力が強い。キリスト教が愛他精神を旨としていることを考えれば、この結果はうなずけるものである。とすれば、長くキリスト教の影響を受けてきたきた社会ではエゴイズムが希薄になり、逆に日本も含めた、その影響の小さかった社会では濃厚になった、と考えることができるだろう。

第二の解釈は、この結果は額面どおりではなく、ある種のバイアスが

加わっているとするものである。日本人は一般にこうした調査票回答の場合でも極端な表現を嫌うことが知られている。たとえば、林（一九九六）はこれを「中間的態度」と呼んでいる。林によれば、日本人は他国民よりも「いちがいにはいえない」とか「時と場合による」といった選択肢を選ぶ傾向が高い。[2] 本調査で言えば、「3なんとも言えない」という選択肢がこれにあたる。とすれば、それは尺度の中位点方向へのバイアスとなる。つまり、平均値が中位点より高い尺度では実際よりも低く評定され、逆に低い尺度では実際よりも高く評定される。

この中間的態度の傾向が低い国々では、おそらくこれと逆のバイアスとなると思われる「社会的望ましさ」(Edwards, 1953) のバイアスが強く働くはずである。言うまでもなく、それは、社会的に望ましいとされる意見は自分に当てはまると評定し、望ましくないとされる意見は当てはまらないと評定する傾向であるから、中位点から離れる傾向のバイアスとなると予想される。

本調査のデータから日本人とアメリカ人、イギリス人を抜き出して比較してみると、いくつかの指標で日本人の強い中間回答傾向、または低い「社会的望ましさ」傾向を確認することができる（本稿では両者を分析的に区別する指標をもたないため、以下単に「中間的態度」または「中間回答傾向」と呼ぶことにする）。まず、四八項目中「3」と回答した項目数の平均は、アメリカ人七・七、イギリス人六・七、日本人一二・五（米-日間 $t=-21.722$, $df=1765.485$, $p<.001$、英-日間 $t=-21.722$, $df=682.201$, $p<.001$）となり、日本人の「3」回答数は三国中で突出している。

以上二つの解釈ではどちらが正しいのか。この問いは二つの点で重要である。まず、当然のことながら、国際比較の結果に関わっている。結果を攪乱するようなバイアスがあるなら、実際の対人関係観がどのようなものであるのか検討しなければなるまい。しかし問題はそれにとどまらず、二つ目の点、すなわち方法論の問題にまでさかのぼるこ

とになるだろう。この調査では、尺度を構成して比較するというエティックなアプローチをとっている。しかし、文化によって異なるバイアスがかかり、しかもこれを取り去ることができないとすると、結局のところ、文化は当該文化の中でしか理解できないとするイーミックなアプローチを浮上させることになってしまう。これはこの調査の方法論そのものに疑問を投げかけるものである。

本稿の分析方針

本稿はこうした経緯から要請される分析について報告するものである。したがって、この点に則して記述するならば、分析は以下のような方針に基づいている。

1．本調査の対人関係観項目から中間回答傾向を分離するよう試みる。具体的に言えば、項目の回答を質的データと見なし、数量化Ⅲ類による分析を行なう。そのときカテゴリー「3」がまとまったパターンとなるかどうか確認する。

2．中間回答傾向が分離され、かつ同時に対人関係観を示す指標が抽出できた場合、その指標について、国籍やその他のデモグラフィック要因によるちがいを検討する。

3．これを因子分析により再構成された指標と比較する。

第三節　調査票の構成と調査対象

本調査で使用した調査票の構成と、調査対象について確認しておきたい。

表2　問Ⅰ項目文

1	自分というものをしっかり持たなければ、世渡りはできない。
2	何事によらず自分のことは自分自身の力でやるべきだ。
* 3	親身になって助け合わなければ社会生活は成り立たない。
* 4	親しくつき合える人がいなければ、毎日の生活が味気ないものになってしまう。
5	個人の持つ権利は、どんなことがあっても守らなくてはならない。
6	他人の意見に頼らず、自分ひとりの判断で事を決めた方がよい。
* 7	「人はなさけ」ということわざもあるように、相手への思いやりが大切だ。
* 8	自分のする行動に対して、きっと相手もうまくこたえてくれると思う。
9	他人の言うことは、そう簡単に信じられるものではない。
10	他人を当てにすることも、他人から頼られることもいやだ。
*11	事を決める場合、身近な人ともよく相談し、その意向をくみとるべきだ。
*12	「旅は道づれ、世はなさけ」ということわざもあるように、初対面の者どうしでも信頼しあえるものだ。
13	社会生活では、自分のしたいこと、欲しいものを、互いにはっきり言うことが必要だ。
14	相手が役立たなければ、つきあいをしても意味がないと思う。
*15	自分のことを隠さずさらけ出した方が、相手とうまくやっていけると思う。
*16	いったん知り合いになれば、その人との縁は、そう簡単に切れるものではない。
17	社交的な会合に出るのは、仕事のためなどであって、喜んで出ようとは思わない。
18	人間の生活は、他人からむやみに干渉されるようなものであってはならない。
*19	社会生活では、お互いに相手の立場に立ってみることが必要だ。
*20	相手が役立つ人かどうかは問題ではなく、その人とのつきあいそれ自体を大切にしていきたい。
21	何といっても人間は自分のことしか考えないものだ。
22	他人との間をうまくやっていこうと思うのも、つきつめてみればわが身が大切だからだ。
*23	「渡る世間に鬼はない」というように、困ったときにもきっと誰かが助けてくれるものだ。
*24	利害をはなれて人とつきあうことほど人生で楽しいものはない。
*25	常に相手の立場に立ってものを考えることにしている。
26	他の人たちの関心事には、それほど興味をそそられない。
*27	問題が起これば、仲間全員で協力して、対処してゆくべきだ。
*28	近所の人と顔を合わせたとき、世間話をするのは楽しい。
29	他人にどう思われようと、それにかまわず自分で判断することにしている。
*30	まわりの人が悩んでいると、とても平気な顔はしていられない。
31	相手に頼まれなければ、人の世話などしたくない。
*32	一身上のやっかいな問題に直面したときには、自分で判断するよりも、家族や友人と相談した方がよい。
33	何事によらず、人をあてにせず、自分自身でやることにしている。
*34	自分が困ったら、友人はきっと助けてくれるはずだ。
35	私は、自分の役に立つような人としかつきあわない。
36	私の個人的な問題については、家族や友人に助けを求めるよりは自分一人で解決しようと思う。
*37	困っている人を見るとその人の気持ちが痛いほどわかるので、何とかしてあげたいと思う。
38	何かするとき、あまり人の手を借りようとは思わない。
*39	喜びだけでなく悲しみも分かち合えるのが、仲間との理想的な関係である。
40	人に自分のことを理解してほしいとは思わない。
41	他人の気持ちをあまり考えず、自分の思い通りにしてもかまわない。
*42	どんな仕事につくかを決めるとき、私は友人の意見を聞くつもりだ。
*43	仲間と離ればなれになっても、いつまでも仲間のままでいたい。
*44	友人とは絶対に切れない関係を持ちたい。
45	近所の人とは、近くに住んでいるからといって、親しくつきあおうとは思わない。
46	知人が仕事で失敗し、仲間から冷たくされていても、本人に責任があるのだから、そ知らぬ顔をしている。
47	自分の意志をつらぬくためには、あまり人の気持ちを考えないほうがよい。
*48	どんな人とも、誠意を持って接すれば通じ合えるものだ。

*間人主義の態度を表わす項目

表3　問Ⅱ項目文について

(1)　組織について
　A　組織というものは，トップから指令を出さないとうまく動かない。
　B　組織というものは，それぞれの者が全体のことを考えて連絡を取り合っておれば，うまく動いていく。
　C　組織というものは，それぞれの者が割り当てられた仕事をきちんとしておれば，うまく動いていく。
(2)　人間について
　A　人間は，生まれつき善である。
　B　人間は，生まれつき悪である。
　C　人間は，生まれつき善であるとも悪であるともいえない。
(3)　自然について
　A　自然を変えていく努力をしなければ，人間の生活は豊かにはならない。
　B　自然の力にさからわずに，自然のなすがままになるのがよい。
　C　自然を破壊しない程度にうまく活用し，自然と調和をはかっていくのがよい。

調査票の構成

米語版、英語版、日本語版、スペイン語版、ドイツ語版、フランス語版、フラマン語版、中国語版が作成された。紙面の都合から、以下、日本語版のみを示すことにする。

問Ⅰは対人関係観を問うもので、間人主義または個人主義の意見を表わす項目文それぞれ二四項目、合計四八項目がある。「1全くそうだと思う」、「2ややそうだと思う」、「3なんとも言えない」、「4ややちがうと思う」、「5全くちがうと思う」から成る5段階リカート法尺度である（表2）。

問Ⅱは組織観、人間観、自然観を問うもので、それぞれ三つの意見項目の中から自分の意見にもっとも近いものを選ぶ（表3）。

問Ⅲは、日本あるいは日本人のイメージを自由記述する問いであるが、ここでは分析対象とはしていない。

問Ⅳは、年齢、性別、最終学歴、婚姻状況、子どもの有無、職業、暮らし向き、信仰の有無、あればその宗教、生まれ育った地域を問う。

表4　サンプル特性

		アメリカ	イギリス	日本	スペイン	ドイツ	フランス	オランダ	ニュージーランド	アルゼンチン	オーストリア	ベルギー	オーストラリア	インド	シンガポール	香港	デンマーク	イタリア	マレーシア	タイ	カナダ	合計
年齢	～19	195	55	294	0	1	17	0	58	32	10	11	23	18	244	0	1	0	47	0	1	1007
	20～24	371	99	406	4	3	46	21	77	129	24	37	61	94	30	4	9	12	13	2	17	1459
	25～29	85	54	499	8	18	15	67	9	63	12	45	21	16	2	4	6	19	23	8	10	984
	30～34	37	39	308	3	16	18	81	4	33	6	40	8	5	5	6	6	4	24	8	6	657
	35～39	24	36	204	7	8	11	52	5	22	6	30	11	4	4	5	2	2	18	1	2	454
	40～49	52	75	427	7	11	7	77	1	67	17	50	10	2	2	1	1	2	10	5	3	827
	50～59	31	30	265	1	3	2	24	0	75	10	23	6	1	0	0	0	0	3	0	3	477
	60～	28	8	129	0	2	4	0	1	51	3	14	3	0	0	0	0	0	0	0	5	248
性	男	396	160	1578	21	31	34	218	60	231	31	131	49	57	187	8	13	17	66	13	17	3318
	女	434	242	960	9	33	86	104	96	239	57	119	95	79	103	16	12	22	77	12	31	2826
職業	自営業	26	12	14	0	0	1	0	1	117	6	14	2	2	0	0	0	2	1	2	2	202
	専門職	88	54	230	19	14	15	139	1	72	7	38	30	22	0	1	2	2	33	1	8	776
	営業職	46	10	308	1	7	4	48	3	35	3	2	2	0	18	5	0	0	5	0	0	497
	事務職	32	43	1006	10	27	18	56	0	41	20	107	6	0	1	11	0	1	10	3	1	1393
	技能職	8	148	342	0	0	3	17	1	7	1	11	0	1	0	1	2	0	1	3	0	546
	学生	556	98	433	0	8	67	4	147	145	37	35	94	108	265	0	20	25	53	0	29	2124
	主婦	9	2	54	0	2	0	1	0	38	2	11	1	3	0	1	0	1	0	0	0	125
	その他	57	26	190	0	4	9	46	1	13	11	25	5	3	2	0	1	5	30	14	5	447
合　計*		840	412	2726	30	65	122	327	156	485	90	253	144	140	295	27	25	39	149	25	49	6399

*データ欠損サンプルの頻度も含む。

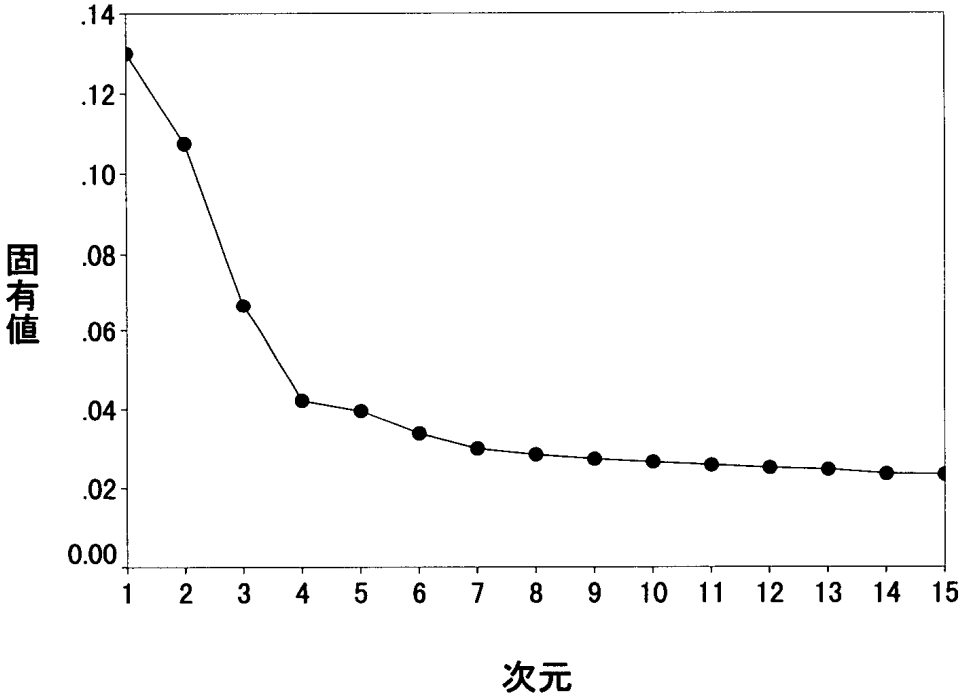

図1　数量化Ⅲ類固有値の推移

調査対象

表4に示される二〇か国から、企業、学校などを中心に六三グループを対象とした。表4は、各国サンプルの年齢、性別・職業別構成を示したものである。

第四節　分析と考察

数量化Ⅲ類

数量化（林、一九九三）は質的データに適当な操作を加えることによってある数量を与え、尺度化を行なう統計分析法である。このうちⅢ類は、外的基準がなく、変数間の関連の強さが、くり返しデータを通して得られる場合に適用され、これにより項目と回答者を同時に数量化してパターン分類を行なうことができる。本稿では、問Ⅰ（対人関係観質問項目）の回答カテゴリーを質的データとして、数量化Ⅲ類によりパターン分類し、そのとき同時に数量化された回答者のケース得点をもとにさまざまな比較を行なう。

問Ⅰの回答カテゴリーは5段階であったが、「1全くそうだと思う」と「2ややそうだと思う」をプールして「肯定」

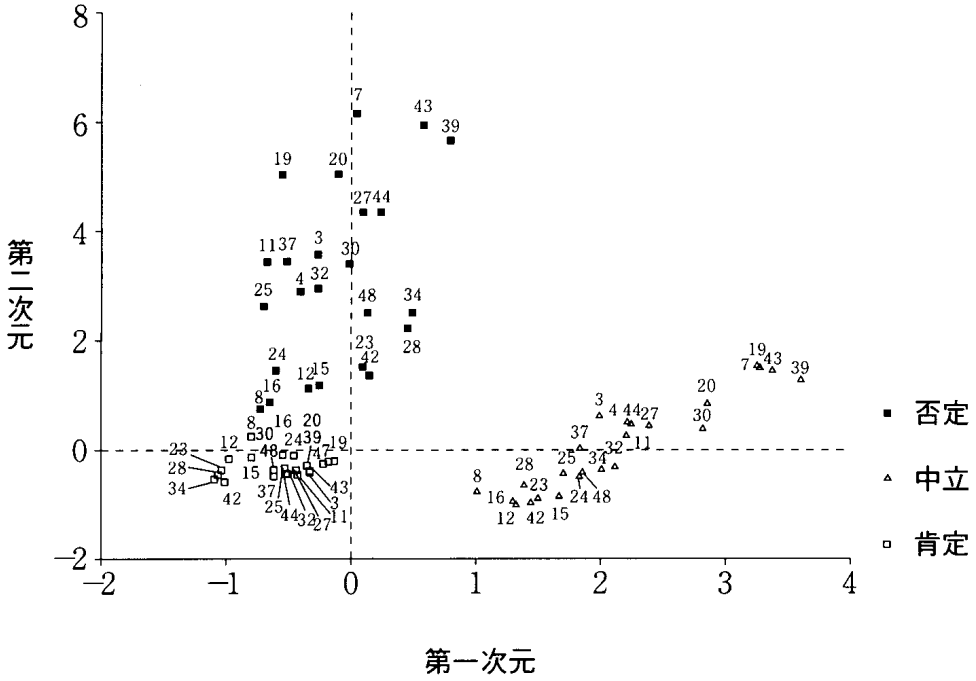

図2　問Ⅰの数量化Ⅲ類得点(間人主義項目)
図中の番号は問Ⅰの項目番号

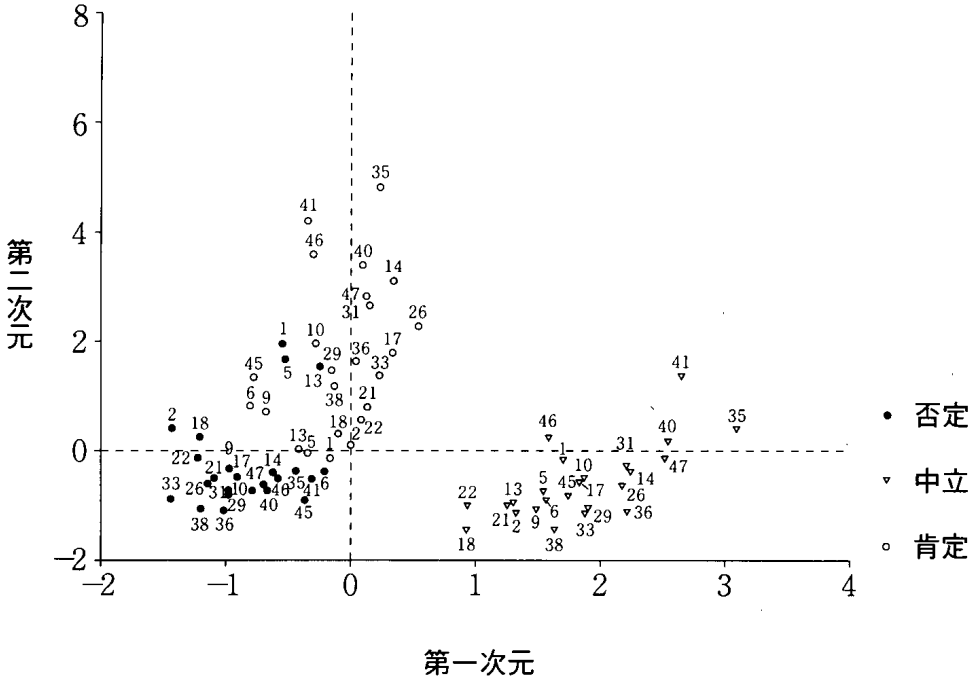

図3　問Ⅰの数量化Ⅲ類得点(個人主義項目)
図中の番号は問Ⅰの項目番号

カテゴリー、「3なんとも言えない」を「中立」カテゴリー、「4ややちがうと思う」と「5全くちがうと思う」をプールして「否定」カテゴリーとした。問Ⅰは四八項目から成り、四八×三カテゴリーで合計一四四カテゴリーを投入した。

固有値の推移は図1に示されるとおり、第三次元からの落ち込みがやや大きく、第二次元までに着目するのが適当と思われる。

散布図を図2、図3に示す。図ではプロットが多く煩雑になるため、間人主義項目と個人主義項目を別の図に表示している。

間人主義項目のカテゴリーのみを表示した図2によれば、肯定カテゴリーのほとんどが第三象限、否定カテゴリーすべてが第一象限から第二象限にかけて、また中立カテゴリーが第三象限から第四象限にかけて、というように三カテゴリーがかなりはっきりと分離している。間人主義項目には、非常に多くの回答者が肯定の回答を示している（二四項目の平均回答数は一五・七と約六五％）ため、プロットが原点付近にすべて密集している。これに比べると中立、否定両カテゴリーはやや広く広がっている。否定カテゴリーも、回答頻度の低い項目ほど原点から離れてプロットされる傾向にある。

個人主義項目（図3）では肯定カテゴリーの多くが第一象限に、否定カテゴリーの多くが第二象限に分布している。図2と図3を重ねあわせると、個人主義肯定カテゴリーが間人主義否定カテゴリーと、個人主義否定カテゴリーが間人主義肯定カテゴリーと、ほぼ対応していることがわかる。また個人主義中立カテゴリーは間人主義中立カテゴリーと同様、第三象限から第四象限にかけて分布しており、こちらも対応関係がある。ただし、個人主義の肯定、否定の各カテゴリーは、間人主義のそれと比較すると、さほどはっきりと分離しているわけではない。個人主義否定カテゴ

リーのうち、項目1、5、は他の項目とは離れて肯定カテゴリーに埋没しており、これに対応する肯定カテゴリーも、否定カテゴリーにかなり近接している。(3)

以上から、まず第一次元は、正方向が〈中立〉、負方向が〈両極〉となる〈中間回答傾向〉次元と見なしうる。第二次元は正方向が〈間人主義否定〉、負方向が〈間人主義肯定〉を表わしており、それぞれが個人主義否定、個人主義肯定といくつかの例外を除いて一致する。したがって、こちらは〈個人主義-間人主義〉次元と呼べるだろう。

これらの次元は文化ごとに分析した場合にも見られる。アメリカ人サンプル（n＝七六四）のみで同様の分析を行なったところ、第二次元が〈中間回答傾向〉、第一次元が〈個人主義-間人主義〉次元であった。日本人サンプル（n＝二六二一）も第一～第二次元はアメリカ人サンプルと同様であり、イギリス人サンプル（n＝三五二）でも第一次元と第二次元からなる平面上に両次元が見出された（濱口ら、一九九七）。このことは本稿が目指している通文化的な数量的比較研究というアプローチの有効性を示唆している、と言いうるであろう。

数量化Ⅲ類から導き出され、各ケースに与えられるケース得点は、各回答者がもつ対人関係観の指標と考えることができる。第一次元のケース得点は〈中間回答傾向〉得点（平均〇・〇〇、標準偏差〇・三六二、範囲〇・六九～一・九九）、第二次元のそれは〈個人主義-間人主義〉得点（平均〇・〇〇、標準偏差〇・三三一、範囲〇・五八～二・五二）となる。(4) なお、両者のピアソン相関係数は〇・〇〇（*n. s.*）である。

以上のように、回答スケールを一度質的データとした上で数量化することによって、〈中間回答傾向〉を抽出することができた。第二次元はこれを分離したときに残される要因であると考えられ、プロットから対人関係観を示す次元であると解釈された。調査の目的は後者にあたるものであるから、次にこの解釈の妥当性を検討しなければならない。

表5　分散分析結果（独立変数：組織観・人間観・自然観；従属変数：数量化Ⅲ類第2次元ケース得点）

交互効果は省略、残差平方和に含まれている。

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
主効果	44.203	6	7.367	73.725	.000
組織観	14.058	2	7.029	70.342	.000
人間観	16.786	2	8.393	83.992	.000
自然観	7.124	2	3.562	35.645	.000
モデル	44.203	6	7.367	73.725	.000
残差	572.786	5732	.09993		
合計	616.989	5738	.108		

第二次元解釈の確認

ここでは、第二次元の解釈が妥当であるかどうかを、問Ⅱの各指標毎のケース得点を比較することによって、傍証的に確かめておきたい。

問Ⅱのうち、特に対人関係観を組織という側面から見た組織観の項目は最も重要な指標といえるだろう。「組織というものは、トップから指令を出さないとうまく動かない」あるいは「それぞれの者が割り当てられた仕事をきちんとしておれば、うまく動いていく」という観点は、個人主義的な組織観を代表している。また、それは同時に、個人主義と裏表の関係にある集団主義的な組織観を表わしているとも言えるだろう。これに対し、「それぞれの者が全体のことを考えて連絡を取り合っておれば、うまく動いていく」という考え方は間人主義と対応する組織観と言えるだろう。

第二次元のケース得点を従属変数、問Ⅱの「組織観」、「人間観」、「自然観」の三項目を独立変数として分散分析を行なうと、表5のような結果が得られた。ただし、簡明を期すため、交互作用は省略し、交互作用の効果はすべて残差平方和にプールしてある。また、この三項目に加え、国籍、デモグラフィック要因の回答別に、第二次元ケース得点の平均を算出し、多重比較（テューキーのHSD検定）を行なった結果を表6－1～表6－2に示している。さらに、参考までに、第二次元ケース得点を目的変数、問Ⅱの三項目、国籍、デモグラフ

表6-1　数量化Ⅲ類第2次元ケース得点（国籍，組織観・人間観・自然観，デモグラフィックデータ別）：その1

平均値降順。項目***：一元配置分散分析で有意（p<.001）。

多重比較：テューキーのHSD検定。E.g. (a)：カテゴリー(a)と有意差あり（p<.05）。

項目	カテゴリー	n	平均	SD	多重比較（.05水準）
国籍***	(a)フランス	100	.3740	.3324	(b)～(t)
	(b)ベルギー	232	.2347	.2610	(d)(h)～(m)(o)(r)～(t)
	(c)インド	124	.1854	.3359	(a)(h)～(t)
	(d)アルゼンチン	389	.1008	.2209	(a)(b)(k)～(m)(o)(p)(r)～(t)
	(e)イタリア	33	.0834	.2139	(a)(t)
	(f)タイ	22	.0672	.3503	(a)
	(g)デンマーク	21	.0369	.2657	(a)
	(h)マレーシア	123	.0170	.2938	(a)～(c)(t)
	(i)オーストラリア	123	.0065	.3080	(a)～(c)(t)
	(j)ニュージーランド	141	-.0011	.2306	(a)～(c)(t)
	(k)イギリス	352	-.0012	.3188	(a)～(d)(t)
	(l)アメリカ	790	-.0147	.3290	(a)～(d)(t)
	(m)オランダ	289	-.0263	.3231	(a)～(d)
	(n)香港	23	-.0285	.2827	(a)～(b)
	(o)日本	2621	-.0381	.2084	(a)～(d)
	(p)オーストリア	82	-.0470	.2762	(a)～(d)
	(q)スペイン	27	-.0479	.2775	(a)～(b)
	(r)シンガポール	276	-.0824	.2497	(a)～(d)
	(s)カナダ	44	-.0851	.3296	(a)～(d)
	(t)ドイツ	55	-.1799	.3198	(a)～(e)(h)～(n)
***組織	(a)トップから指令	808	.0927	.3749	(c)
	(b)割り当てられた仕事	1272	.0640	.3591	(c)
	(c)全体のことを考えて	3714	-.0424	.2974	(a)(b)
***人間	(a)性悪説	357	.2089	.4570	(b)(c)
	(b)どちらでもない	3736	.0062	.3219	(a)(c)
	(c)性善説	1712	-.0590	.2866	(a)(b)
***自然	(a)変えていく	194	.0832	.0328	(b)(c)
	(b)なすがまま	430	.0817	.0175	(a)(c)
	(c)調和	5187	-.0101	.0044	(a)(b)
年齢***	(a)60歳以上	202	.0674	.2782	(f)～(h)
	(b)35～39歳	425	.0346	.3514	(h)
	(c)30～34歳	602	.0211	.3669	(h)
	(d)50～59歳	425	.0145	.2880	(h)
	(e)40～49歳	757	.0022	.3073	
	(f)20～24歳	1351	-.0085	.3288	(a)
	(g)25～29歳	913	-.0107	.3233	(a)
	(h)19歳以下	950	-.0437	.3172	(a)～(d)
***性	(a)男	3093	.0189	.3448	
	(b)女	2548	-.0262	.3004	

表6-2　数量化Ⅲ類第2次元ケース得点（国籍，組織観・人間観・自然観，デモグラフィックデータ別）：その2

平均値降順。項目***：一元配置分散分析で有意（p<.001）。

多重比較：テューキーのHSD検定。E.g. (a)：カテゴリー(a)と有意差あり（p<.05）。

項目	カテゴリー	n	平均	SD	多重比較（.05水準）
学歴***	(a)小学校	56	.1021	.3186	
	(b)中学校	248	.0605	.3529	(e)～(g)
	(c)大学院	330	.0378	.3182	
	(d)短大・高専	825	-.0038	.3609	
	(e)大学	2276	-.0077	.3612	(b)
	(f)高等学校	1268	-.0132	.3745	(b)
	(g)その他	303	-.0234	.3118	(b)
婚姻状況***	(a)その他	19	.1366	.3668	
	(b)離婚	111	.1087	.4154	(e)(f)
	(c)死別	52	.0985	.2946	
	(d)異性と同居	200	.0871	.3380	(e)(f)
	(e)既婚	2056	-.0006	.3192	(b)(d)
	(f)未婚	2963	-.0162	.3199	(b)(d)
子	(a)いる	1817	.0068	.3751	
	(b)いない	3514	-.0072	.3507	
職業***	(a)自営業	174	.1319	.4048	(c)～(h)
	(b)主婦	99	.0630	.3019	
	(c)専門職	697	.0309	.3097	(a)(h)
	(d)その他	399	.0150	.2914	(a)
	(e)学生	1981	-.0030	.3292	(a)
	(f)現業・技能職	501	-.0169	.3267	(a)
	(g)販売・営業職	462	-.0270	.3326	(a)
	(h)一般事務職	1306	-.0328	.3197	(a)(c)
暮し***	(a)下	210	.1315	.4620	(c)(d)
	(b)上	125	.0690	.4144	(d)
	(c)中の下	2289	-.0056	.3234	(a)
	(d)中の上	2906	-.0150	.3043	(a)(b)
宗教***	(a)ロシア正教	3	.1900	.4087	
	(b)ユダヤ教	29	.0919	.5085	
	(c)その他	227	.0557	.3100	(i)～(k)
	(d)カトリック	743	.0358	.3065	(i)～(k)
	(e)イスラム教	85	.0357	.2787	
	(f)神道	26	.0228	.3296	
	(g)無宗教	3244	-.0003	.3375	
	(h)儒教	7	-.0092	.4044	
	(i)仏教	646	-.0345	.3187	(c)(d)
	(j)プロテスタント	355	-.0543	.2713	(c)(d)
	(k)キリスト教（他）	206	-.0560	.3114	(c)(d)
	(l)ギリシャ正教	5	-.1121	.1927	
地域***	(a)大都市	964	.0456	.3331	(c)～(e)
	(b)農山漁村	562	.0234	.3518	(e)
	(c)中小都市	1202	-.0031	.3266	(a)
	(d)一部市街地化	1325	-.0116	.3199	(a)
	(e)都市近郊	1589	-.0330	.3091	(a)(b)

ィック要因を説明変数とした数量化Ⅰ類（林、一九九三）の分析結果を表7に示す。

まず、表5は、すべての説明変数の主効果が有意であることを示している（$p<.001$）。

表6-1によれば、「トップから指令」、「割り当てられた仕事」の組織観を選択した回答者のケース得点の平均は高く、「全体のことを考えて」は低い。多重比較によれば、前二者と後者とが対立していることがわかる。前二者が個人主義、後者が間人主義を代表する組織観であるから、この指標は第二次元が〈間人主義-個人主義〉次元であること支持していると言っていいであろう。

人間観の項目では、「人間は、生まれつき善である」は低く、「生まれつき悪である」は極めて高い。「生まれつき善であるとも悪であるとも言えない」は平均値〇に近く、前二者の中間に位置している。相互信頼主義を一属性とする間人主義が性悪説よりも性善説となじみやすいとすれば、この結果は第二次元を〈個人主義-間人主義〉とする解釈を支持している。

さらに、自然か人間の一方が他方を一方的に支配するという図式よりも、両者の調和を図ろうとする自然観の方が、間人主義的対人関係観になじみやすいと考えれば、「自然を変えていく」または「自然のなすがまま」という選択が個人主義、「自然と調和」という選択が間人主義という結果はうなずけるであろう。

以上から、組織観、人間観、自然観の各指標は、数量化理論Ⅲ類の分析から得られた第二次元が〈個人主義-間人主義〉次元であり、かつ正方向が個人主義、負方向が間人主義を表わすという見解をある程度裏づけていると考えられる。

表7　数量化Ⅰ類結果

説明変数：組織観･人間観･自然観、国籍、デモグラフィック要因。

目的変数：第2次元ケース得点。

数値はカテゴリー数値。太字は各項目の偏相関係数。

重相関係数 r=.4235。

組織観	**.1666**	**職業**	**.0317**	**国籍**	**.3052**
トップから指令	.0924	自営業	-.0020	アメリカ	.0345
全体のことを考えて	-.0354	専門職	.0197	イギリス	.0057
割り当てられた仕事	.0503	販売・営業職	-.0157	日本	-.0758
人間観	**.1606**	一般事務職	-.0028	スペイン	-.0561
性善説	-.0417	現業・技能職	-.0067	ドイツ	-.2029
性悪説	.1823	学生	-.0001	フランス	.3954
どちらでもない	.0044	主婦	.0217	オランダ	-.0432
自然観	**.1271**	そのほか	-.0022	ニュージーランド	.0774
変えていく	.1623	**暮らし向き**	**.0733**	アルゼンチン	.1202
なすがまま	.0760	上	.0417	オーストリア	.0149
調和	-.0121	中の上	-.0116	ベルギー	.2634
性別	**.0682**	中の下	.0038	オーストラリア	.0081
男	.0189	下	.1016	インド	.1911
女	-.0237	**宗教**	**.0982**	シンガポール	-.0160
学歴	**.0288**	カトリック	-.0399	香港	.0397
小学校	-.0150	プロテスタント	-.0662	デンマーク	.0594
中学校	.0136	キリスト教(他)	-.0388	イタリア	.0263
高等学校	-.0025	ユダヤ教	.0339	マレーシア	.0210
短大・高専	-.0110	ギリシャ正教	-.0978	タイ	.0675
大学	.0070	ロシア正教	.0213	カナダ	-.0500
大学院	-.0189	イスラム教	.0566	**年齢**	**.1092**
その他	-.0022	仏教	-.0123	19歳以下	-.0760
婚姻状況	**.0723**	儒教	-.0949	20～24歳	-.0369
未婚	-.0058	神道	.0975	25～29歳	.0001
既婚	-.0033	そのほか	.0050	30～34歳	.0304
異性と同居	.0283	無宗教	.0199	35～39歳	.0479
離婚	.1406	**生育地域**	**.0548**	40～49歳	.0401
死別	.0537	農山漁村	.0003	50～59歳	.0483
その他	.0817	一部市街地化	-.0027	60歳以上	.0664
子どもの有無	**.0627**	都市近郊	-.0197		
いる	-.0346	中小都市	.0048		
いない	.0181	大都市	.0293		

対人関係観の国際比較

以下、第二次元ケース得点を単に「〈個人主義‐間人主義〉得点」と呼んで、議論を進めていこう。まず回答者の国籍（正確には回答者の居住する国家）による違いを検討したい。

〈個人主義‐間人主義〉得点を従属変数、国籍とデモグラフィック要因を独立変数として分散分析を行なうと、表8のような結果を得る。ただしこれも交互作用は省略している。表8が示すには、国籍の主効果は有意であり（$p<.001$）、この点から、国際比較は有意味なものであるように思われる。

表6‐1によれば、平均ケース得点が最も高い（個人主義的である）のはフランスで、以下、ベルギー、インド、アルゼンチン、……と続く。逆に最も低い（間人主義的である）のはドイツである。日本は平均値〇よりもやや間人主義寄りである。多重比較によれば、日本は上位四国および、最下位のドイツとのみ有意差があり、ここから、今回のサンプルの中でほぼ中間かやや間人主義寄りであることが見てとれる。その他の東洋諸国は三位インド、六位タイから一八位シンガポールまで広い範囲に分布しており、間人主義対個人主義の対人関係観の対からは、東洋対西洋といった対立図式は見えない。

前項で言及したように、〈個人主義‐間人主義〉得点を目的変数、国籍とデモグラフィック要因を説明変数として、林の数量化理論Ⅰ類による分析を行なっている。これは質的データを説明変数として一般線形モデルを適用するものであり、これにより、説明変数の各水準の偏回帰係数を求めることができる。

分析により算出された重相関係数は〇・四一七六と低いが、表7によると、国籍の偏相関係数は説明変数の中では最も高い。また、各国の偏回帰係数を見ると、日本はドイツに次いで低い。これは、日本人が間人主義の対人関係観をもつことを示している。

表8　分散分析結果（独立変数：国籍，デモグラフィックデータ；従属変数：数量化Ⅲ類第2次元ケース得点）

交互効果は省略、残差平方和に含まれている。

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
主効果	54.616	64	.853	9.168	.000
国籍	32.210	19	1.695	18.212	.000
年齢区分	2.250	7	.321	3.453	.001
性別	2.747	1	2.747	29.513	.000
最終学歴	.349	6	.058	.624	.711
婚姻状況	2.063	5	.413	4.433	.001
子どもの有無	.780	1	.780	8.381	.004
職業	.676	7	.097	1.037	.402
暮らし向き	3.520	3	1.173	12.604	.000
信仰の対象	3.642	11	.331	3.557	.000
地域	1.194	4	.298	3.206	.012
モデル	54.616	64	.853	9.168	.000
残差	428.382	4602	.09309		
合計	482.998	4666	.104		

量的データ分析指標との比較

〈個人主義－間人主義〉得点を指標とすると、因子分析をもとに再構成した尺度と比較して、より予想に近い結果となった。これは分析の経緯から、〈中間回答傾向〉を分離したためであると予想されるが、この点をデータから再確認しておこう。

国籍ごとの〈中間回答傾向〉次元ケース得点を表9に示す。なお、このケース得点を従属変数、国籍を独立変数とした一元配置分散分析では有意な主効果が得られた（df=13/5201, F=119.247, p＜.001）。表9には水準間の多重比較（テューキーのHSD検定）結果を付している。

表9によれば、日本の〈中間回答傾向〉次元ケース得点は非常に高い。これは第2節で確認した日本人の中間回答傾向の高さを反映している。

さらに次のような指標を導入してみよう。〈中間回答傾向〉および〈個人主義－間人主義〉得点がそれぞれ平均以上（＋）か平均未満（－）かをもとにサンプルを分割し、四つのグループをつくる。このグループごとに、因子分析による

表9　数量化Ⅲ類第1次元ケース得点（国籍，組織観・人間観・自然観別）

項目***：一元配置分散分析で有意（p<.001）。

多重比較：テューキーのHSD検定。E.g. (a)：カテゴリー(a)と有意差あり（p<.05）。

項目	カテゴリー	N	平均	SD	多重比較（.05水準）
国籍***	(a)香港	23	.1863	.3959	(i)～(t)
	(b)日本	2621	.1636	.3626	(f)～(t)
	(c)シンガポール	276	.1006	.3105	(h)～(t)
	(d)タイ	22	.0897	.3626	(o)～(t)
	(e)ドイツ	55	.0451	.2819	(i)～(l)(n)～(t)
	(f)マレーシア	123	.0178	.3047	(b)(i)～(l)(n)～(t)
	(g)オーストリア	82	-.0143	.2299	(b)(k)(o)～(r)(t)
	(h)イタリア	33	-.1143	.2946	(b)(c)
	(i)オランダ	289	-.1264	.3029	(a)～(c)(e)(f)(t)
	(j)ニュージーランド	141	-.1492	.2452	(a)～(c)(e)(f)
	(k)アメリカ	790	-.1497	.2953	(a)～(c)(e)～(g)(t)
	(l)インド	124	-.1584	.2307	(a)～(c)(e)(f)
	(m)デンマーク	21	-.1686	.2362	(a)～(c)
	(n)オーストラリア	123	-.1735	.2650	(a)～(c)(e)(f)
	(o)イギリス	352	-.1864	.2626	(a)～(g)
	(p)アルゼンチン	389	-.2007	.2995	(a)～(g)
	(q)フランス	100	-.2020	.2212	(a)～(g)
	(r)カナダ	44	-.2561	.2941	(a)～(g)
	(s)スペイン	27	-.2573	.2031	(a)～(f)
	(t)ベルギー	232	-.2594	.2508	(a)～(g)(i)(k)
***組織	(a)トップから指令	808	.0681	.3584	(c)
	(b)割り当てられた仕事	1272	.0336	.3660	(c)
	(c)全体のことを考えて	3714	-.0297	.3495	(a)(b)
***人間	(a)性悪説	357	.0696	.3580	(b)(c)
	(b)どちらでもない	3736	.0138	.3698	(a)(c)
	(c)性善説	1712	-.0454	.3271	(a)(b)
***自然	(a)変えていく	194	.0832	.3688	(c)
	(b)なすがまま	430	.0817	.3764	(c)
	(c)調和	5187	-.0107	.3560	(a)(b)

再構成尺度得点を比較すると、表10のようになる。

日本が属する第三象限（〈中間回答傾向〉＋、〈個人主義－間人主義〉－）の尺度得点を他の三つの象限と比較すると、たとえば間人主義得点は二番目に低く、エゴイズム得点は二番目に高い。〈個人主義－間人主義〉得点の低さ（間人主義傾向の高さ）にもかかわらず、〈中間回答傾向〉が中位点方向へのバイアスとして働いているのが、この得点に現れているものと思われる。

また、第一次元として抽出されたのは〈中間回答傾向〉次元であるが、これは第二次元（〈個人主義－間人主義〉次元）よりも固有値が大きいこと、つまり要因としての影響力が大きいことを意味する。この影響力のちがいは、表における数値にも表れている。

表10　因子分析による再構成尺度得点
（数量化Ⅲ類による属性集団間の比較）

＋は平均（0）以上、－は平均未満。

個人主義－間人主義	中間回答傾向 －	中間回答傾向 ＋	
＋	(n=1322)	(n=1090)	
	3.90	3.56	←間人主義
	2.44	2.90	←エゴイズム
	3.68	3.64	←エゴティズム
	3.07	2.70	←受動的間人主義
－	(n=2161)	(n=1531)	
	4.15	3.84	←間人主義
	2.00	2.46	←エゴイズム
	3.24	3.23	←エゴティズム
	3.70	3.22	←受動的間人主義

対人関係観とデモグラフィック要因

最後に〈個人主義－間人主義〉得点と各デモグラフィック要因との関係についてまとめておかなければならないが、ここでは、分散分析、多重比較および数量化Ⅰ類をもとにした簡単な考察を加えておくにとどめておきたい。

表8によると、〈個人主義－間人主義〉得点に対して五％水準で主効果のあるデモグラフィック要因は、年齢、性別、婚姻状況、子どもの有無、暮らし向き、信仰の対象、地域である。

主効果のあるものだけ各水準の平均得点（表6－3）を参照しよう。まず、年齢別に見ると、六〇代、三〇代、五〇代、四〇代、二〇代、一〇代の順に、間人主義傾向が強くなっている。三〇代を除けば、年齢が高くなるにつれて個人主義傾向が高くなるという結果になっている。性別では、男性が女性よりも個人主義的である。婚姻状況では、nの小さい「その他」、「死別」を除くと、「離婚」、「異性と同居」は個人主義、「既婚」、「未婚」は間人主義となっている。離婚する、同居しても入籍しないという選択が個人主義的な結婚観を反映した行動であることを考えれば、極めて順当な結果であるといえる。以上は数量化Ⅰ類によるカテゴリー数値（表7）でもほぼ同じ結果になっている。

子どもの有無の場合は、平均値では、いる者の方がいない者よりも個人主義的である（表6－2）が、数量化Ⅰ類のカテゴリー数値を見ると逆になっている（表7）。おそらく他の説明変数の効果を考慮することによって、平均値とは異なる結果が出たものと思われる。

暮らし向きに関しては、「下」とする者が最も個人主義的で、「上」がそれに続く。「中」とする者はそれよりも間人主義的である。順序尺度の上端と下端が類似しているという点で興味深い。

宗教は、カトリックが個人主義、仏教、プロテスタントが間人主義、ある意味で日本人と関係の深い「無宗教」[5]はほぼ平均値である。ただし、数量化Ⅰ類の結果（表7）を見ると、カテゴリー数値はカトリック、プロテスタントがともに負（間人主義）、仏教も負であるが〇に近く、無宗教は正（個人主義）になっている。数量化Ⅰ類の結果の方が、宗教に関する通念に近い。

生まれ育った地域では、大都市が最も個人主義的、都市近郊が最も間人主義的である。これも都市の人間関係についての通念とかけ離れたものではない。

第五節　おわりに

以上、本稿の主な分析結果をまとめると以下のようになる。

- 対人関係観質問項目を数量化Ⅲ類で分析すると、〈中間回答傾向〉、〈個人主義-間人主義〉の二つの次元が得られた。
- 日本人サンプルは〈中間回答傾向〉が高い。
- 〈中間回答傾向〉の効果を除外しない対人関係観指標においては、日本人サンプルは個人主義的と判定されるが、除外するとむしろ間人主義的になる。

次に〈個人主義-間人主義〉次元の項目得点をもとに、尺度再構成を試みなければならないが、本稿では別のテーマとして見送っている。

ところで、本稿の分析から、「日本人の対人関係観は、どちらかと言えば間人主義的である」という結論を導き出せるだろうか。必ずしもそうではない。林（一九九六）によれば、日本人の「中間的回答」傾向は、おはじきを使った恒常和法による回答でも見られた。これは「中間的回答」が単なる言葉の問題ではなく心の問題であることを示すと言う（一八九～一九五頁）。本稿で見出された〈中間回答傾向〉も同じく「心」の傾向であるとすれば、対人関係観はすでに「心」のレベルでバイアスを受けていることになる。とすれば、このバイアスを除外しない尺度もやはり心理における対人関係観と呼びうるであろう。したがって問題は、何を「対人関係観」と呼ぶか、ということになる。[6]

しかし、ひとまず本稿では、それが「心」のレベルであれ、広義の対人関係観から「中間的回答」傾向を分離することができた点で、大きな収穫があったと言うべきであろう。

（付記） 本稿は、科学技術振興調整費　総合研究「人間の社会的諸活動の解明・支援に関する基盤的研究」、第三分科会「人間の社会的編成原理の解明と設計の研究」の分担課題「関係集約型人間による社会編成原理の研究」の研究成果の一部である。

注

（1）全体に、日本人サンプルは間人主義意見項目の得点が全サンプルよりも低い傾向にある。間人主義二四項目の得点の総和（範囲二四～一二〇、中位点七二）を見ると、日本人八七・九〇、全体サンプル九〇・六一であった。個人主義項目の方はほとんど差が見られなかった（日本人七〇・〇〇、全体サンプル七〇・五八）。

（2）さらに林は、中間的態度の例として、「非常に満足」よりも「まあ満足」や「どちらかと言えば満足」を好む傾向をあげている。本稿ではこちらについては全く取り上げていない。

（3）これらの項目は表面的妥当性が疑わしく、尺度再構成に際しては除外する必要があるかもしれない。

（4）数量化の時点で、平均〇、分散はカテゴリーとケース得点の相関係数ρの二乗となるように調整されている。

（5）日本人サンプルで宗教を「信じない」と答えた回答者の比率は七九・九％で、二〇か国中最も高い。なお、全サンプルでは五六・九％である。

（6）心理が構成概念である以上、こうした問題は不可避である。しかしもとより、これは本研究のような心理学的研究が無意味であることを意味する訳ではない。

参考文献

Edwards, A. L. 1953 "The relationship between judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed." *Journal of Applied Psychology* 37 90-93.

濱口恵俊　一九七七　『「日本らしさ」の再発見』　日本経済新聞社（一九八八　講談社学術文庫）

濱口恵俊・金児暁嗣・古川秀夫・疋田正博・岡本裕介・丹羽直樹　一九九七　受託研究報告書『関係集約型人間による社会編成原理の研究―間人主義・個人主義の国際比較調査』　国際日本文化研究センター

林知己夫　一九九三　『数量化―理論と方法』　東洋経済新報社
林知己夫　一九九六　『日本らしさの構造―こころと文化をはかる』　東洋経済新報社